



TITLE:

新國民主義の立場(下) - その學史的考察 -

AUTHOR(S):

石川, 興二

CITATION:

石川, 興二. 新國民主義の立場(下) - その學史的考察 -. 經濟論叢 1936, 43(5): 655-677

ISSUE DATE:

1936-11-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130867>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論經濟

號 五 第

卷三十四第

行發日一月一十年一十和昭

論 叢

地方稅賦課の方法……………

法學博士 神戸正雄

利子歩合の決定……………

文學博士 高田保馬

新國民主義の立場……………

經濟學博士 石川興二

時 論

賣上稅を論ず……………

經濟學博士 沙見三郎

研 究

我國に於ける「社會事業」の實際的概念……………

經濟學士 中川與之助

貨幣經濟論的立場より見たる財産稅……………

經濟學士 中谷實

保險プールについて……………

經濟學士 佐波宣平

說 苑

對支クレヂツトとしての英吉利輸出信用保證制……………

經濟學博士 小島昌太郎

米穀自治管理法の實施……………

經濟學博士 八木芳之助

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

新國民主義の立場（下）

——その學史的考察——

石川 興二

五

既に述べしが如く、ヘーゲル史觀は神の實踐史觀である。故にそれは人間の立場より見れば必然史觀である。即ちこの立場に於ては人間の實踐なるものは許されない。この史觀に於て最も實踐的な人間と見られる「世界史的人間」又は「英雄」と雖も神の世界史實現の手段たるに過ぎないのであつて、その仕事が終わるならば「核實の空虚なる皮の如く脱落して了ふ。」即ち彼等は「理性の狡智」によつて働かされて居るのである。

かくてヘーゲルに於ては、哲學者なるものも實踐的立場に立つて實在に對するものではない。従つて人間の立場に於ける實踐的哲學も許されないこととなる。故に彼は客觀精神を詳論せし『法の哲學』の序文に於て曰く「哲學的著作としてこの書は、國家をあるべき様に構造すべし *einen Staat, wie er sein soll, konstruieren zu sollen*, と云ふことから最も遠く距たらなければならぬ。哲學的著作に於て存し得る教は、國家をそれが如何にあるべきかではなくむしろ國家即ち倫

理的宇宙が如何に認識さるべきかを教へることに向ひ得るのである。¹⁾この序の終に當つて更に一般的に曰く「世界が如何にあるべきかの教 *das Belehren, wie die Welt sein soll*」について尙ほ一言云ふならば、この教への爲めには元來哲學は常に餘りに遅く來るのである。實在がその形成過程を完成し自らを成し遂げた後にはじめて哲學は世界の思想として現れる。實在の成熟期に於て初めて理想的なるものが現實的なるものに對立して現れて、此世界をその實體性に於て把握し、智界の形態に於て建設すると云ふことを、概念が云へると同様に歴史が必然的に示めすのである。²⁾即ち前述せし如くヘーゲルに於ては各國民の發展の「夕」の段階に於てはじめてその實在の哲學が成立するのである。

このヘーゲル哲學に一度没頭した青年マルクスはフョイエルバッハを媒介とすることによつて先づこの形而上學的立場より脱却し彼自身の實踐的立場に進み行つた。曰く「汝等、思辯的な神學者並に哲學者共に私は忠告する。汝等もし在るが儘の事物に即ち眞理に改めて近付かんと欲せば須く、在來の思辯哲學の概念と偏見とより汝等を解放せよ。而して汝等にとつて、眞理と自由との道は、淨火の火たる *Feuerbach* 火の小川を通じてに非らずしては存せぬのである。かのフョイエルバッハこそは現代の煉獄である」³⁾このフョイエルバッハはヘーゲル哲學を批判しその形而上學的立場を脱却する道を與へた。即ちヘーゲルの世界精神は我々人間の理性を人間外に措定して超越的な理性としたものであり、それは基督教に於て「人間が自己の本質を對象化し、然る

1) Hegel, Philosophie des Rechts, (von Lasson. S. 15.)

2) Ibid. S. 17.

3) Marx=Engels Gesamtausgabe, Erste Abteilung, Band I. Erster Halbband. S. 175.

後再び自己を此對象化されたる……本質の對象たらしめる」と同である。即ち「ヘーゲルは、失はれた衰へた基督教を哲學に依つて回復せんとする努力である」とした。而して「人間の自然的立場は……眞の立場であり、絶對的な立場であり、従つて哲學的立場である。」と主張し、人間の本質に立つことを以て新哲學の立場であるとした。かくてヘーゲルに於ける世界精神又は神は現實の人間に引き下されたのである。

マルクスはこのフョイエルバッハの人間の立場によつてヘーゲルの形而上學的立場より脱却したが、而も彼はこの立場に止まることは出来なかつた。これフョイエルバッハの「人間」は尙ほ抽象的なものであり具體的現實的なものでないと考へたが故である。即ち曰く「從來の凡ての唯物論（フョイエルバッハのも含めて）の主要な缺陷は、對象、現實、感性が、ただ客體または直觀の形式のもとに捉へられて、感性的・人間的活動、實踐 sinnlich-menschliche Tätigkeit, Praxisとして主體的に subjektiv 捉へられて居ないことである。……フョイエルバッハは人間の活動そのものを、對象的活動 Gegenständliche Tätigkeit として捉へてゐない。それ故彼は、基督教の本質の中で、たゞ理論的な態度のみを眞正に人間的な態度と見て居る。……かくて彼は革命的な實踐的・批判的な活動 der praktisch-kritischen Tätigkeit の意義を把握してゐないのである。」と述べて居る。

かく人間の活動を對象的實踐的批判的な活動とし人間をその實踐的本質に於て把握せし青年マルクスにとつては眞の哲學者なるものはこの實踐的な人間の立場に立つて實在を實踐的に變革せ

1) Feuerbachs Sämtliche Werke. von Bolin und Jodl. Band VII, S. 37.

2) Band II, S. 317.

3) Marx; These über Feuerbach. Kröners Taschenausgabe, Band 92, S. 3.

んとするものである。即ち「哲學者達はこれまで世界を只だ種々に解釋して來たが世界を變革することが問題である。」かくてマルクスに於ては哲學なるものはヘーゲルに於けるが如き靜觀的形而上學的なるものたることを止めて、實踐的な人間が實在を對象としてこれを批判し變革するところの實踐的なものとなつたのである。かくてヘーゲルに於ける神の實踐の立場を人間の實踐の立場に引き下し而も「公然かの偉大なる思想家の門人たることを承認した」マルクスは、ヘーゲルが神の實踐の立場に於て先づ實踐の諸要因を明にし次にこの諸要因によつて史的發展的構造を明したところのものを、改めて人間的實踐の立場に引き下さねばならなかつた。而してそれは先づ「マルクスが初めて將來哲學の基本的原理を表明した」と云はるゝ『獨佛年誌』の諸論文の中に見られるのであつて其後の研究はこれを哲學的並に科學的に發展せしめて行つたのである。

六

マルクスの實踐哲學的立場を明にせんとせば、先づその實踐の諸要因を明にしなければならないのであるが、而もこゝに注意すべきことは飽まで人間的實踐的立場に立つて世界を變革せんとせし彼は、その變革せんとする現實在の分析批判の中にこの實踐の諸要因を現實的に確立せんとせしことである。アリストテレスは『倫理學』に於て人間の本質的構造の上に人間善一般を明にしこれを目的因とし更にこれを實現すべき形相因を『政治學』に於て家族、財産制度、國家等につき明にしその革命論に於て動力因を明にしこれ等實踐の諸要因を統一することによつて最後に理

想的國民社會實現論を一般的に明にした。ヘーゲルに於ては主觀精神論に於て人間の本質的構造が明にされ客觀精神論に於ては先づ諸種の社會的本質の構造が明にされこれ等の論の上に歴史哲學に於て神の實踐の四要因が明にされその史的發展的實現として世界史の史的發展的構造が明にされたのである。これ等の論は實在並に實踐の一般的本質論である。然るに人間の實踐の立場に立つて現實在としての資本主義社會を變革せんとせしマルクスはかゝる一般的本質的な研究に止まることは出来なかつたのであつて、更に進んで現實在としての資本主義社會を分析し以てこの特定の現實在に對する實踐の諸要因を明にせんとした。故に先づこの現實在の嚴密なる分析を特に重んじたのである。かくしてマルクスに於ては實踐の四要因の一般的本質が明にされると共に資本主義社會變革の爲めの諸要因が明にされることゝなつたのである。

即ち彼は『獨佛年誌』中の論文に於て次の如くに述べて居る。「改革家の間に一般的無政府狀態が擴がつてゐるに止まらず、各人ともにならざるべきかと云ふことについて何等の確な見解をもたない事を自ら告白しなければならぬであろう、とは云へ我々が世界を獨斷的に見込づけずに舊社會の批判の中から始めて新世界を發見しやうとすることは、又正しき新傾向の長所である。」更に曰く「未來の構想とあらゆる時代に對して用意周到な事とが我々の與り知る所でないとするば、それだけ愈々我々の現實爲し遂げなければならぬ事柄が確實な譯であつて、私は一切の現存せるものゝ假借なき批判がそれであると思ふが、この假借なきと云ふのは、批判がその結果に

對して恐れを感じないと云ふ意味であると共に、現存諸權力との衝突に對しても恐れを感じないと云ふ意味である」

かくの如く資本主義社會を變革せんとせし彼は、先づこの舊社會の批判の中から新社會を現實すべき實踐の諸要因を明にせんとしたのであつて、この實在研究は、デイルタイが實踐的認識の土臺として Wirklichkeitserkenntnis 「實在認識」又は Gegenständliches Auffassen 「對象把握」と云へるものに相當する。この實在認識が後年の彼の經濟學體系に發展したのである。故に彼は最初の經濟學體系に『政治經濟學批判』 Zur Kritik der politischen Ökonomie なる題名を與へまた彼の大著 Das Kapital に Kritik der politischen Ökonomie なる副題名を附し以て經濟學の對照たる資本主義社會の「批判」をも意味したのである。故にこの『政治經濟學批判』の序に於ても「科學の入口には地獄の入口と同じやうに、次の要求が掲げられねばならぬ。『こゝに一切の疑懼を棄てねばならない、一切の怯懦がこゝに死なねばならない』と述べて居る。

彼はこの現實批判をヘーゲルの辯證法の立場に於てしたのであつて『資本論』第一卷の序に於て次の如くに述べて居る。「辯證法はヘーゲルの手において神秘化されたけれどもそのことは決して彼がその一般的運動形態をはじめて包括的な且つ意識的な仕方で敘述したと云ふことを妨げはしなかつた。辯證法は彼にあつては逆立ちしてゐる。吾々は、神秘的な外皮の中に合理的な核心を發見するために、これを顛倒しなければならぬ。辯證法は、その神秘化された形態においては、

ドイツの流行となつた、それは現存事物を聖化するかに思へたからである。合理的な姿に於ては辯證法は、市民生活及びその空論的代辯者達にとつて、一の苦悶であり恐怖である。何となれば辯證法は現存事物の肯定的理解のうちに、同時にまたその否定のその必然的没落の理解を含め、あらゆる生成した形態を運動の流れにおいて、それ故にまたその暫時的方面から、把握し、何物によつても畏伏せしめられず、その本質上批判的であり革命的であるから。」こゝにヘーゲルの國民の辯證法的發展の「夕」の段階に於てその現實の本質を把握し以て現實を否定するに至る哲學者が積極的變革的な姿に於て現れる。かくてマルクスは市民社會の本質を哲學的に把握した。

かくマルクスが變革せんとする實在を批判することによつて彼の實踐的思惟に現實的基礎を與へんとせしことは實踐的研究にとつての大なる進歩である。これ實踐の諸要因の知識が眞に實踐の基礎たり得んが爲めには、この實在の批判的研究の中に於てその實現の可能性が確められて居なければならぬからである。かくて次にマルクスに於ける實踐の四要因を見ることとする。

一、**目的因**、先づそれが爲めに、この實在の變革が爲さるべきところの目的因は、一言にして云ふ、*die menschliche Kraftentwicklung, die sich als Selbstzweck gilt*「自己目的として妥當するところの人間的能力の發展」である。ヘーゲルに於ける實踐者は神でありこの神の本質は理性であるが故にこの實踐の目的因はこの世界理性たる神が世界史的表現を通じて自己の本質を自覺することであつた。然るにマルクスに於ける實踐者は人間でありこの人間の本質は實踐的活動にあ

るが故に人間の自由はその實踐的本質の實現である。この點に於てマルクスは、國家の法に従ふことが人間の自由であるとしたヘーゲルと異なり、人間を人間たらしむる能力を遺憾なく發揮せしむることを以て人間善と考へたアリストテレスの立場と相通するものがある。

而もアリストテレスが經濟的生產階級を以て國家の奴隸となし人間たることより除外したに對しマルクスはこの經濟的生產階級を人間の生活に高めることを以て最も重要な問題とした。この點に於てはアリストテレスに於ける目的因を現代化したこととなる。然しこの人間はアリストテレスに於ては本質的に國民的存在に於て考へられたに對しマルクスに於ては社會的階級對立に於てあるものとして考へられたのである。このアリストテレスと相違する二點に於て目的因に關するマルクスの社會主義者としての特色が見られる。このことは青年マルクスの次の主張に於て特に明に見られる。曰く、「舊き世界が俗人に屬すると云ふことは眞實である。」「勿論彼俗人が世界の主であるのはたゞ蛆蟲が屍體に蔓る様に、その仲間と共に世界を滿たして居るからそうであるまでの事である。それ故にこれ等の主人達の仲間若干の奴隸でさへあればいゝのであり、そして奴隸の持主共は自由であることを要しない。若し彼等がその土地及び人民を財産としてゐるために優越の意味で主人と云はれるものとすれば彼等はやはりその人民達に劣らず俗人なわけである。」「人間それは精神的存在在であり自由人共和主義者であるべきである。」「人間の自己感情即自由はこの人間の胸中に於て初めて再び覺醒さるべきであらう。……この感情のみがこの社會から

1) Marx, Aus den Deutsch-Französischen Jahrbüchern, (Kröners Taschenausgabe Band 91, S. 212.)

再び人類の最高目的の爲めの人類の共同體即ち民主的な國家を作ることが出来る。」かくて彼に於ては實踐の目的因は人類社會的自由として考へられたのである。

二、形相因、次にそれを實現すべきところの形相因即ち理想社會は、マルクスがこゝに「人類の最高の目的の爲めの共同體」と云へるもので、そこに於て「人間的自由」が實現せられる社會である。彼はまたこれを「自由の國」*die Reich der Freiheit*として述べて居るがそこには經濟生活の本質と經濟生活と眞の人間生活との理想的な關係とが明にされて居る。先づ曰く「餘儀なき必要と外的な合目的性によりて決定される勞働が存在しなくなつたところに實際初めて自由の國が開始される。」こゝに先づ人間の經濟的な活動なるものが眞の人間の生活より區別され且つその本質が後に眞の人間生活を規定するところの「それ自身目的とされる人間的能力的發展」なる語に對して「餘儀なき必要と外的な合目的性によつて決定される勞働」なる語を以て規定された。即ち眞の人間生活が人間を人間たらしむる能力をそれ自身目的として發展さす生活であるに對し經濟生活は人間生活の爲めの手段として必要な物財の爲めに止むなき手段生活である。以下この經濟生活について述べられる曰く「未開人がその諸欲求を充たす爲めにその生命を保存し再生産する爲めに自然と闘はねばならなかつた如く文明人も亦同じことを爲さねばならない。人間は如何なる社會形態に於いても、如何なる在り得べき生産方法の下にも、そうしなければならぬのである」即ちこゝには前に人間の眞の生活に對し形式的に規定されたる經濟生活なるものが更に内容

的に、人間の諸欲求を充たしその生命を保有し再生産する爲めに必要な物財を得る爲めに自然と闘ふところのものと規定され且つかゝる經濟生活なるものはその時と處の異なるに拘らず人間の存在と共に普遍的なるものなることが述べられて居る。次に曰く「人間の發達につれ諸欲望が増大するから、この自然必然の國 *das Reich der Notwendigkeit* も擴大される。と同時にまた此等諸欲を充す生産力 *die Produktivkräfte* も擴大されて来る。」に經濟生活は「自然必然の國」として規定され、その進歩が人間の欲求の進歩に伴ふ生産力の進歩に於て見られて居る。この生産力の進歩が、生産關係との辯證法的關係によつて人類歴史を押し進める力としてマルクス史觀に於て考へられたところのものである。以上述べられたところは人間の經濟生活の根本的な性質であつて將來社會に於ても變らないところのものであるが、この將來の理想社會に於ては、この自然必然の域領も或意味に於て自由となると考へられた。曰く「この方面の自由なるものは、自然との物質交換により恰も盲目的な力によつての如く支配されることを止め、社會化された人類が聯帶したる生産者達が、自然との物質交換を合理的に規制し、共同的な管理に齎らし、以て最小の力の支出と人間の本質に最も相應しい最も適當した諸條件の下にこれを行ふことに於てのみ存し得る。而もそれが必然の領域たるには變りないのである。」マルクスは經濟的生產生活を以て經濟生活全體がそれにより規定される土臺と考へるのであるが故にこゝにマルクスの經濟生活の理想が見られる。即ち今や社會的歴史的な存在の構造を自覺した人間はこれまでの如く經濟的生產

生活に他律的盲目的に支配されることを止めて自覺的意識的にこれを規制支配するものとしてこゝに經濟生活の自由が見られたのである。かく物的價值たる經濟價值の生産生活を本質上規制するべきものであることは極めて秀れたる見解であるが、而もこの規制の主體を「社會化されたる人間」又は「聯帶せる生産者達」とするところに、マルクスの社會主義的特徴が見られる。次に眞の人間生活について、曰く「此合理化されたる必然の領域の彼岸にそれ自身目的としての人間的能力の發展即ち眞の自由の國 *die menschliche Kraftentwicklung, die sich als Selbstzweck gilt, das wahre Reich der Freiheit* がはじまる、然しそれはその土臺としてのかの必然の國の上に於てのみ榮えることが出来るのである。勞働日の短縮がその根本條件である。」かくの如く人類の眞の人間生活は合理化されたる經濟生活の上に於てのみ實現されると考へられたことは、經濟と人生との關係についての極めて適切なる考察であつて、この點に於てマルクスはカントを中心とする獨逸理想主義哲學を繼承しこれにその實現の經濟的基礎を與へたものであると云ふことが出来る。この「自由の國」の考へもカントの「目的の王國」にその實現の經濟的地盤を與へたものと考へることが出来る。かくて唯物史觀に立てるマルクスの全思想體系はこの「自由の國」の實現を究極的に意圖するものとして理想主義的人道主義的熱情を以て貫かれて居ることを見るのである。アリストテレスが人間生活より經濟的生產階級を奴隸として除去せし古代的制限も、アリストテレス自らが「若し導く手なくして梭が織り撥が立琴を弾くとせば親方は僕婢を要しないでもある

うし主人は奴隸を要しないでもあろう」と述べし思想を徹底せしマルクスによつて、近世に於ける生産力の進歩の土臺の上に解消されることとなつたのである。

更にマルクスはこの理想社會の實現の過程を史的發展的に考察して居る。即ち「極く大づかみには、アジア的の、古代「ギリシヤ、ローマ」的の、封建的の、及び近世市民的の、生産の仕方が經濟的社會構成の進歩し來つた段階的時期として目ざされ得る。市民的生産諸關係は、社會的生産過程の最後の敵對的形態である。…されば人類社會の前史 *die Vorgeschichte der menschlichen Gesellschaft* は、この社會構成を以て終を告げる。」と述べて居るが、かくて現代の市民社會の變革と共に人類社會の段階に進み入ることとなるのであつてこの人類社會が即ち前述せし「自由の國」である。アリストテレスが理想社會の實現を藝術家が藝術品を創造するが如くに考へたのとは異なつてかくの如く歴史發展的に考察したことはマルクスに於ける進歩である。而も彼が今日の社會に至るまでの發展の順序としてこゝに挙げしところはヘーゲルがその歴史哲學の本論に述べしところに基づいてゐるのであるが、ヘーゲルが國家成立以前を前史としたに對し、現段階をも含めて資本主義社會止揚以前を人類社會の前史とし次に來るべき段階を「人類社會」の時代と把握せしところに、社會主義者としての彼の立場が現れて居る。

要するにマルクスの理想社會論は經濟と人生との具體的統一に於て、經濟的生産階級の向上に於て、理想社會實現の史的發展的考察に於て、形相因の考察につき多くの貢獻をなしたのである

1) Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie. Vorwort (von Kantsky. S. I. V)

が、而もそこには諸種の社會主義的限界が見られる。即ち前述せし如く集合社會的な有り方を以て人間の本質的な有り方とする社會主義者としてのマルクスは實踐の形相因即ち理想社會について、この社會的な有り方を徹底して考へて居る。社會主義者にとつては國家は社會の小數なる支配者が多數なる被支配者を支配する道具であるとして社會的に還元して考へられるが故に、國家なき社會としての人類の萬民社會が理想的なものとなることは當然である。かくてまたこの社會に於ける支配者は「聯帶せる生産者達」となる。

三、素材因、次にこの理想社會がそれに於て實現さるべき素材因についてであるが、マルクスは唯物史觀の方式¹⁾に於て次の如くに述べて居る。即ち「一の社會形態は、その形態が狭まざる様になるまで總ての生産力が發展してからでなくては、決して没落せず、また新なりより高き生産關係は、その物質的な生産諸條件が舊社會の母胎内で孕まれたるまでは、決して從來のものに取つて代りはしない。かくて人間は常に自ら解決し得る問題をのみ問題とする。何となれば、よく正確にこれを觀察するならば、問題それ自身は常に、その解決の物的諸條件がすでに存在して居るかあるいは少くともその生成の過程にあるかの場合にのみ、初めて發生するものだからである。」と一般的に述べ、更に現代の市民社會の止揚について「市民的生産諸關係は、社會的生產過程の最後の敵對的形態である。市民社會の母胎内に發展しつつある生産力は、同時にこの敵對の解決の爲めの物的諸條件を作る。されば人類社會の前史は、この社會構成をもつて終を告げる」

1) Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie. S. LVI.

と述べて居る。

マルクスはこゝに社會的な生産力と生産關係との間にこの辯證法的發展的關係を認め、理想社會實現の爲めの物的素材の意義を史觀發展的に明にしたのであつて、それは正にアリストテレスの素材因論を補ふところのものである。而もこのマルクスの素材論に於てもまた社會主義者としての自からなる制限がある。即ちアリストテレスが重んじたところの國民的存在の基礎的素材である國土並に人口は、萬民社會を理想とするところのマルクスにとつてはこゝに考慮されて居ないのである。

四、動力因 次にこの理想社會がそれによつて實現さるべきところの動力因について、考察しよう。この問題については青年マルクスに於て特に明晰なる考を見ることが出来る。即ちマルクスは社會主義者としてこの動力因を社會の階級的分裂の構造の中に於て見た。先づ資本主義社會は資本家階級が支配者たる社會であるが故にこの社會を變革するところのものはこの資本家階級を止揚することに満心の關心を有する一群の人々でなければならぬと考へられた。マルクスはかゝる一群の人々を順次に検討してこれを見出さんとした。即ち「解放の積極的可能性は何處に存して居るか」と云ふことを問題とし「答は次の如くである。…自らを社會の一切の領域より解放すると共に社會の爾餘一切の領域をも解放してやらずには自らを解放することが出来ない様な、それを一言にして云へば人間の完全な喪失であり、従つて唯だ人間の完全な取戻によつてのみ自

分自身を得ることが出来る様な一領域を作り上げることである。かくの如き社會の解消を一の特別の身分となすものはプロレタリアートである。」

而も此プロレタリアートをかゝる領域に作り上げるが爲めには理論を與へることによつてこれを自覺させなければならぬと考へられた。即ち「物質的強力は物質的強力によつて倒されねばならない。併し乍ら理論も亦、それが大衆を把握するや否や物質的強力となる」¹⁾「哲學がプロレタリアートの中にその物質的武器を見出すと等しく、プロレタリアートは哲學の中に彼の精神的武器を見出す」かくて「此解放の頭腦は哲學であり其心臓はプロレタリアートである。哲學はプロレタリアートの止揚なくしては實現されることは出来ないし、プロレタリアートは哲學の實現なくしては自らを止揚することは出来ない。」と述べて居る。更に彼はこのことを人類社會的に徹底せしめて、無產者には祖國なし、萬國の勞働者よ團結せよ、として居る。

アリストテレスは、その政治學の革命論¹⁾に於ては政治的革命的種々なる構造を考察して居るが、その理想社會實現論に於ては根源的動力因としての教育のみを考察した。然るにマルクスは、こゝに被壓迫階級と哲學との統一に於て直接的現實的な動力因を明にせんとして居る。即ちヘーゲルの國家の「夕」の段階に於ける哲學者がその市民社會の特殊的原理の矛盾として見られたる有產者階級と「勞働に結ばれたる階級」としての階級對立に結ばれてこゝにマルクスに於て無產者を自覺すべきところの變革哲學者として現れた。この哲學者の考は青年マルクスに於て特に顯著であ

1) Aristotle, Politica. 1301^a

るが、後年のマルクスに至り彼の經濟學の研究に於て市民社會の構造が唯物辯證法的發展に於て精細に分析され「篡奪者が篡奪される」¹⁾に至るまでの發展的構造が自然必然的なものとして把握されるにつれ、この哲學者の實踐的動力因としての意義は低下する結果となつた。これは後年マルクスの唯物史觀の立場の徹底の當然なる結果であると云はねばならない。また彼がこの社會の發展的動力としての階級對立を國民社會より逸脱せしめて、無產者の萬民社會的聯帶に求めしことも彼の社會主義的限界がある。

以上に於てヘーゲルが神の實踐の立場に於て考へたる實踐の諸要因は、マルクスに於て人間の實踐の立場に於て明にされた。故に次にヘーゲルがその實踐の諸要因によつて發展し行く歴史の構造を明にしたが如く以上明にされたるマルクスに於ける實踐の四要因の統一によつてマルクスに於ける歴史の發展的構造が明にされねばならぬのである。事實彼の歴史觀の方式其他に於ては以上明にされたる諸要因が歴史的發展的な統一に齎らされて居るのである。而もこゝに注意すべきことはこの歴史觀が青年マルクスに於ては實踐的であるか後年マルクスに至つては必然的となり行けることである。即ち青年マルクスに於ても「凡て從來の社會の歴史は階級鬭爭の歴史である」のであるが而も「その鬭爭はいつも社會の革命的變革を以てか又は鬭爭階級の共倒れを以て終つた」とされて居るのであつて、こゝには歴史の發展は自然必然的なものでなく變革が成るか又は成らないかの全く反對向方の實現の可能であつて、これを決するものとして人間の實踐に十分

1) Marx, Das Kapital I. S. 803.

なる餘地が與へられて居る。然るに後年のマルクスは資本論第一版の序文に於て次の如くに述べて居る。「資本家的生産の諸の自然法則から發生する社會的諸對立の發展程度の如何は、それ自身としてはこゝでは問題でない。こゝでの問題は、これ等の法則自體であり、鐵の如き必然性をもつて作用し、自己を貫徹する、これ等の諸傾向である。産業の比較的發達した國は發達の後れた國に對して、かゝる國自身の將來の姿を示めすにすぎない」¹⁾また曰く「一國民は他國民から學ばねばならぬしまた學び得る。たとひ一つの社會はその運動の自然法則の足跡を發見したとしても――そして近代社會の經濟的運動法則を曝露することはこの著作の究極目的であるが――その社會は自然的な發展諸段階を飛ばしてしまふことも出來なければ、立法を以てそれを除くことも出來はしない。だがその社會は生みの苦しみを短くし且つ和らげることは出来る」と述べて居る。かくの如く社會の發展法則を鐵の如き必然性をもつて作用し自己を貫徹するところのものであると考へるに至れば、その史觀は必然史觀となり來りヘーゲルに於けると同様に人間の實踐を容れないところのものとなるのである。これ前述せしが如く、現實在の分析をこれが變革の爲めの實踐的認識の基礎として重んじ實踐の四要因の可能性をこの實在認識の中に見んとせし彼は、ヘーゲルの辯證法を逆立ちせしむることにより市民社會の分析を進めるに従つて現實在に於ける生産力と生産關係との辯證法的發展の中にその變革の必然性を見るに至つた²⁾が故である。只だ後年マルクスに至つても、ヘーゲルに於けるが如く人間の實踐を全くは排除せずして僅に新な社會の「生

1) 2) Marx, Das Kapital. Vorwort XXXVIII

3) Marx, Kritik der politischen Ökonomie. Vorwort. S. LV 参照

みの苦しみを短かくし且つ和らげることは出来る」一點に於て認容してゐる。而も歴史の發展方向自身は必然的に定まつて居るのである。故に實踐の四要因についても前述せしところに於て明に見られるが如く、後年マルクスに於ける思想は自然必然の色調を有して居るのである。

かくて實踐の四要因を史的發展的に統一し、以てその上に現實の實踐を基礎づけるべき實踐史觀なるものは、唯心的必然史觀でもあり得ないと共に唯物物的必然史觀でもあり得ないのであつて、それはこの兩者を止揚するところのものでなければならぬ。即ち、人間的生命とその表現との辯證法的關係に立つ歴史觀がそれである。それは國民の發展を國民的生命とその國民的表現との辯證法的關係に於て把握するところの國民的生命史觀であること、嘗て述べたが如くである。而もこれを具體化せんとせばこれが要素としての實踐の四要因を本質的並に現實的に明にしなければならぬこと曩の場合に於けると同様である。こゝにはかゝる論を詳に展開する餘地がないが故に、以上國民主義者アリストテレス、國家主義者ヘーゲル、社會主義者マルクスについて學史的に考察し來れるところを國民主義の立場より統一的に考察し以て現代の國民主義に於ける實踐の四要因を具體的に明にする爲めの土臺を置くと共に新國民主義の實踐的立場を明する。

七

先づ目的因について述べんに、今日の國民主義に於ける目的因を確立せんにはこれを以上の學史的聯關に於て云へばアリストテレスに於けるが如くそこに於てはじめて人間が人間となり得る

ところの國民的存在の本質を重んずるところの立場に根本的に立ち、これをその分化發展としてのヘーゲルに於ける國民國家の觀念とマルクスに於ける人格的生命並に人類的生命の觀念とを以て具體化さなければならぬ。即ち眞の國民主義の立場に於ては、内に全成員の人格的生命を重んじてその發展完成を計り以て國民的生命全體の具體的な發展完成を計ると共にこの同一原理に立つて外に各國民の個性的生命を相互に重んじその相互の發展完成により人類的生命全體の最も具體的な發展完成を計るのである。かくて眞の國民主義は人類の國民主義である。これに對し今日まで國家主義と混同して國民主義と云はれて來たものは利己的國民主義とも云はるべきものであつて現代の資本主義社會に於ける個人の利己心の行動を國民單位にまで擴張したにすぎない。かくて「中外に施して悖らざる」眞理ではない。即ちそれは強者の便宜たるにすぎないのであつて弱者には妥當しないのである。

これを形相因との關聯に於いて云へば、國家主義は内に國家意志の獨裁を實現せんとし外に自國の獨裁的支配を實現せんとするに對し社會主義は國民單位を飛躍して理想的な萬民社會を實現せんとする。然るに眞の國民主義の立場に於ては人類的生命は具體的には何等かの國民的生命として存在するものであるが故に人類的生命を愛すると云ふことは具體的には各國民的生命を愛することである。而して各國民的生命を愛すると云ふことは、各國民的生命の發展完成を計ることであり、この爲めには各國民的生命の個性を十分に重んじ相互を發展完成せしめなければならない。

かくて人類文化は最も豊富なる發展を果げ、この豊富なる人類文化の土臺に於て各國民文化は愈々十分なる發展を果げ以て人類文化全體に一層功獻し得るのである。こゝに人類文化と各國民文化の間には、一國內に於ける個々人の個性的生命と國民の全體的生命との間に於けるが如く、具體的な *Bedeutungszusammenhang* 意義聯關が實現されることとなる。この眞の國民主義の立場に立つてのみ社會主義的萬民主義の立場と共に今日支配的となりつゝある利己的國民主義としての國家主義の立場を十分批判することが出来るのである。

この國民主義に於ける形相因を具體的に明にすることはこれを學史的に云へば、アリストテレスの家族觀、財産制度觀、國家觀を統一せる國民觀をその分化發展としてのヘーゲルの國民國家觀マルクスの理想社會觀ことにそれに於ける人生と經濟との考察を通して具體化することであると共にその實現の可能性を現實在の分析中に明にしなければならない。

次に眞の國民主義の立場に於てかゝる理想社會がそれに於て實現さるべき素材因はこれを學史的に考へればアリストテレスの重んじた理想的な國民社會の基礎的素材としての國土と人口との考へを更にヘーゲルの國民國家の國土並民族の考により具體化さなければならない。發展的素材については物的素材に關するマルクスの考が重要であるが、更に人的素材についてはヘーゲルの思想の中に特に重要なものが見られる。即ち眞の國民主義の理想社會は人類相互の人間的理解の上に實現されなければならないのであるが、かくの如き人的素材は人類の市民社會段階を通じ

てのみはじめて用意されると考へられる。ヘーゲルの次の語は、人類を中世的な排他的偏見より解放し相互に人間としての理解にもたらしところの市民社會の働を知るのにとつて特に有意義である曰く「それに於て總ての人が同様であるところの普遍的な人として我が把握されると云ふことは、教養即ち普遍性の形式に於ける個々人の意識としての思惟に屬する。人間がかく普遍的な人と見做されるのは、彼が人間なるが故であつて、猶太人、舊教徒、新教徒、獨逸人、伊太利人等であるが故ではないこの意識は無限に重要である。――若しそれが萬民主義として具體的な國家生活に對立すべく固着する場合に於てのみ缺點多きものである」¹⁾即ち市民社會を通じて相互に人間としての普遍的理解に達した人々が相互の國民生活を重んずる時、これが眞の國民主義社會の土臺としての人的要素である。然らずしてかゝる人々が萬民的存在にのみ固着し國家生活と對立するに至れば、それが正に萬民主義であつて社會主義者の理想とする萬民社會の人的要素である。これに反しかゝる人々がその反動として自己の國家生活にのみ固着して人類的存在に對立する時それは中世的反動的なる國家主義者の人的要素となる。事實これ等相異なる人的素材が今日これ等相異なる立場の人的地盤をなして居るのである。

次に物的素材について考へんに眞の人類生活の根柢にはその物質的土臺としての人類の經濟生活がなくてはならない。それはこの眞の文化生活の爲めに必要なる經濟的財貨を調達する生活である。而してアリストテレスが眞の人間生活の爲めの經濟的必要は無限なるものではないと述べ

1) Hegel, Philosophie des Rechts. § 209.

2) 拙著、『精神科學的經濟學の基礎問題』第一八〇頁參照

て居ることは人類生活全體に於ても妥當するのである。従つて今日重要な經濟的問題となれる自然富源についても、各國民自然の生産物を國民の意識に基いて相互に交換しかくて、人類自然の「國民有人類用」の立場に徹するならば、他國の有する國民的自然を侵し合ふことなくして各國民はその人間生活に必要な經濟財を十分に調達し得るのである。

然るに人類社會の現状に於てはこの「生活の爲めの經濟」が「戰爭の爲めの經濟」により犠牲とされつゝある。即ち各國民の飽くなき經濟的追求是精神的文化價值の社會に於ける追求と異なり物的有限的價值の社會に於ける競争なる故に相互を衝突せしめ戰爭の危險に近けこの「戰爭の爲めの經濟」の見地より各國民ことに後進國は自然富源の占有を増大することを必要とし、この自然富源の占有の爲めに更に戰爭を必要とする。かくて「生活の爲めの經濟」なる正しき軌道を一度逸脱せし現代人類社會は「經濟の爲めの戰爭」と「戰爭の爲めの經濟」との止むなき惡無限の循環の中に投入されたのである。この根本的矛盾の立場より脱却し得ざる以上人類社會に於ける經濟的生產力の進歩も戰爭の慘激と人類の自滅に資するにすぎない。即ち經濟的生產力の進歩は善ともなり惡ともなるのであつてこれを驅使する立場が利己的國民主義なる時人類惡とならざるを得ないのであつて眞の國民主義即ち人道的國民主義なる時はじめてそれは人類善となる。

最後に今日の國民主義の立場に於ける動力因の確立についても以上の學史的考察の上に立つことが必要である。即ちアリストテレスに於ては、その革命論に於ける一般的考察の外には理想社

會の實現論に於ては特に根原的なものとしての理想的な國民教育を重んじてあるが、ヘーゲル並にマルクスに於ては直接的な動力因が明にされてゐる。而してヘーゲルに於ける究極の動力因は神であるがこの神がそれによつて自己の「計畫」を世界史の場面に實現するところの動力因として特に重んじたものは國家意志の負擔者としての「英雄」又は「世界史的人間」であつた。他の總ての人々はこれによつて自己の内面性を自覺せしめられ抗し難き力を感じて彼等の心の案内者に従ふものと考へられた。マルクスに於ては、この動力因が現實の資本主義社會變革について現實的に考察された。先づその土臺をなすものは被壓迫階級としての工場労働者でありこれが哲學者によつて階級的に自覺されなければならないと考へられたのである。即ちこゝに動力因に關するヘーゲルに於ける國家主義的考察がマルクスに於て社會主義的に轉化させられたのである。要するに國家主義者ヘーゲルに於ては國家の働きが、社會主義者マルクスに於ては社會の働きが、動力因について特に分析解明されたのである。眞の國民主義の立場に於てはこの國家の面と社會の面とが本質的統一に於て把握されなければならない。而もこのことは國民主義的實踐哲學の自覺の上になされねばならないのであるが、かゝる國民主義的實踐哲學並に科學を確立することは、市民社會の「夕」に於ける現代智識階級の最も重要な使命である。

以上學史的考察に基いて眞の國民主義の實踐的立場を明にしたが故に、稿を改めてこの新國民主義の實踐哲學を具體的に考察しよう。